

# 家庭と学校、生徒同士を「つ・な・ぐ」訪問学級 ～訪問教育の新たな在り方を探って～

香川県立香川丸亀養護学校  
教諭 真鍋 ゆかり

## 1 はじめに

訪問教育は、重度の障害や病気により、特別支援学校に通うことが難しい児童生徒を対象に、教員が週に数回、児童生徒のいる家庭や病院などで行う教育である。それは、限られた時間や場所での限られた人とのほぼ一対一の授業である。近年、コロナ禍の中で多様な学びの形が生まれており、訪問教育においてもこれまでとは違うアプローチの仕方ができるのではないかと感じていた。私は、常に訪問生には学んでいる場所は違っていても、本校の一員として同級生と一緒に学習する経験をし、仲間とともに学校生活を送る喜びを感じてほしいと思っている。また訪問教育は、校内生や教員とつながり、家庭以外の人や空間などもっと広い世界を知る可能性をもっていると考えている。そして、学校が訪問生にとって笑顔になれる場所であってほしいと思い、本実践に取り組んだ。

## 2 実践の内容・方法

### (1) 課題設定の理由

本校は知的障害教育校として、中讃地域の特別支援教育を担う学校であり、訪問学級が設置されている。令和4年度の全校児童生徒数は247名で、そのうち訪問生は小学部1年に1名、2年に1名、中学部3年に2名の計4名が在籍し、訪問教育担当者は小・中学部に各1名である。本校の教育ビジョンは「つながれた手と手で育てる丸養」で、「つなぐ」取組を重視しており、訪問教育の目標を次のように立てている。

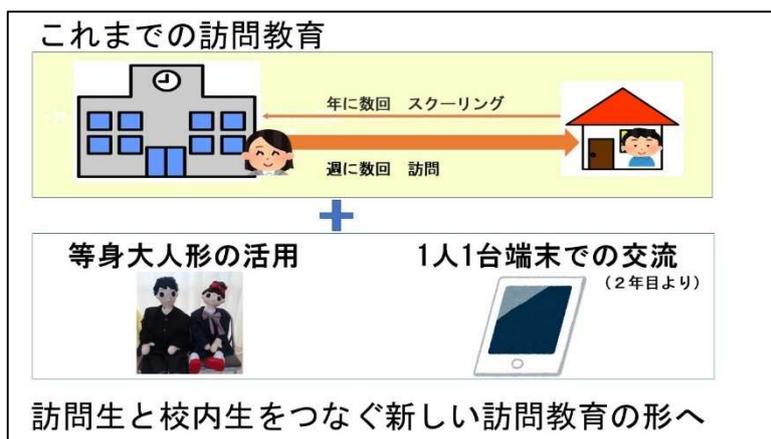
#### 訪問教育の目標

- ① 個々の実態に応じた学習内容を設定し、健康を維持するとともに感覚・身体機能を高める。
- ② 学習活動や行事への参加を促し、友達と交流する機会を増やす。

上記の教育ビジョンと訪問教育の目標を受けて、訪問生を同一学部内の教員や同級生とつなぐことが大切だと思い、目標②を核として本実践に取り組むことにした。ここでは、主に中学部在籍の2名の2年間の実践について述べる。

### (2) 同一学部間内の教員や同級生と「つなぐ」ために

訪問教育は各生徒の家庭での授業となるため、校内の教員や児童生徒には訪問生の状況はなかなか伝わりにくく、名前は知っていてもどのような指導・支援をしているのかは知られていないことが多い。そこで、訪問教育担当者が学校と家庭をつなぐ媒体となり、お互いがうまくつながっていくように働きかけることが重要であると考えた。これまでの訪問教育の形に、①校内での訪問生の代役としての等身大人形の活用（写真①）、②1人1台端末での交流（写真②）を加え、訪問生と校内生をつなぐ新しい訪問教育の在り方を探るため、この二つを主に実践した。



【本実践の訪問教育の形】



写真① 等身大人形

### ① 等身大人形

人形は、小学部5年生時に学習発表会で訪問生の代わりに参加できるようにと当時の担任が作成したものである。校内の教員や生徒が訪問生の存在をより実感できるようにほぼ等身大で作られ、その後の学校行事や授業にも学級の一員として参加してきた。小学部から在籍している生徒にとっては、なじみのある人形である。中学部でもそのまま学級に「在籍」し、学校行事や日頃の授業にも参加するようになった。

### ② 1人1台端末での交流

実践2年目からは、訪問生が校内の学校行事や授業に直接的に参加できるように学年団の教員と授業や行事を計画した。訪問生の始業式や終業式にビデオでメッセージを送ることから始め、始業式の時間にあわせてリモートで校歌斉唱を訪問家庭で聞いたり、また作業学習や音楽などの時間には、家庭と学校をつなぎ、リアルタイムで訪問生も同じ授業を受けたりする機会を設定した。



写真② 始業式の校歌斉唱

## 3 実践の成果

### (1) 訪問生の代役としての等身大人形の活用

人形が参加した活動は、人形や訪問教育担当者が参加しやすい、学年全員で実施する特別活動、音楽、部行事、中学部の縦割りで構成される作業学習とした。実践2年目では、人形が在籍している学級の生徒が人形を抱いて教室移動することが当たり前になり、学級の一員という意識をもつことができていた。校内生が訪問担当者に「Aちゃんは元気だった?」「今日、Bくんは何をしたの?」と日々の様子をたずねてくることが増え、名前を呼んだり、生徒同士で人形用の椅子を準備したり、一緒に楽器を触ったり、絵本の読み聞かせをしたりするなど、人形と関わる場面が増えていった。また、校内の教員から訪問生や人形の授業や行事への参加の仕方を提案されることが増え、より積極的な「つながる」場面が多くみられるようになった。このような学校での場면을訪問生の保護者にビデオや写真を見せながら話をすると、「学校でいっぱい勉強しているんやね。」「友達が増えたね。」などと学校での人形の様子をうれしそうに聞いてくれたり、「作業班で何を作っているんですか。」「遠足はどこに行くんですか。」など、学校の授業の様子に関心を示してくれたり

することが増えた。

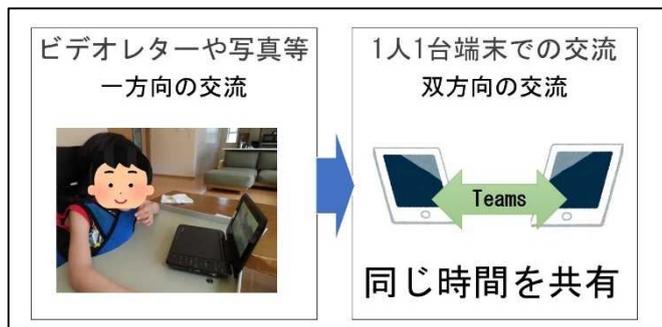
さらに、人形は校内生にも好影響を与えた。小学生時代には授業になかなか参加できなかつたり、人前での発言が苦手であったりした生徒が「人形と一緒にならできる。」と言い、自主的に活動する場面が見られた。等身大の人形を契機として、相手を思いながら自分で考えて行動できる生徒や、友達と一緒に活動する楽しさを感じる校内生が増えた。「人形と一緒に」ということが心の安定や不安軽減にもなっており、この人形の存在は校内生の成長にもとても役立っていた。



【等身大人形活用での校内生の成果】

## (2) 1人1台端末での交流

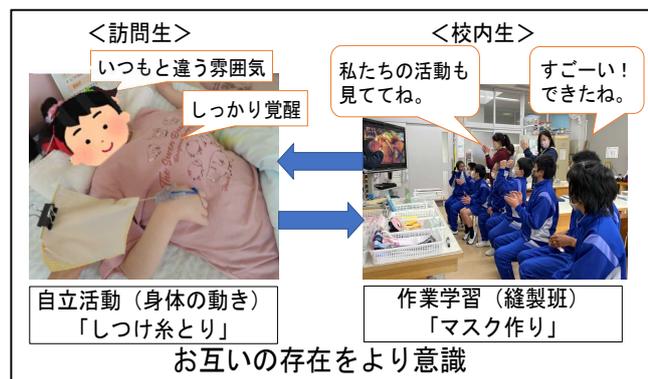
最初はビデオ通話やビデオレターから実施した。なかなか家庭に行けない管理職や同学年の職員には、メッセージや絵本の読み聞かせなどをビデオレターにして訪問生とつながってもらった。そして、



【1人1台端末での交流の変化】

1人1台端末が各生徒へ支給され、オンラインで交流しやすい環境になったことで、訪問生は自宅に居ながら交流行事や授業にも参加でき、多くの人と同じ時間を共有する実践を行った。交流行事では自己紹介をする場面でリモート参加することができた。また、作業学習では作業班の一員として、訪問生が取り組める作業内容を分担させてもらい、訪問生が実際に取り組んでいる様子をリアルタイムで校内生に見てもらえる機会を設定した。それは結果的に、作業学習の研究授業に家庭から訪問生が参加することができ、その他の授業でもしてみたいという生徒や教員の声が挙がるようになった。

このよう1人1台端末を効果的に活用し、管理職、校内生や教員を訪問教育に巻き込むことができた。訪問生は、1人1台端末での交流を繰り返すことで、日常では経験できない刺激を受け、画面を通して友達の存在を意識しているような表情を見せるようになった。今では、リモートの準備をしているだけで笑顔を見せたり、声を出したりし、明らかに何かを期待している様子が伺える。校内生は、自分ができることを相手に見てもらうことで満足感があつたり、訪問生の「生」の反応を感じたりすることでより仲間意識を高めていった。お互いの存在を意識することで、それぞれが成長する姿が多く見られた。



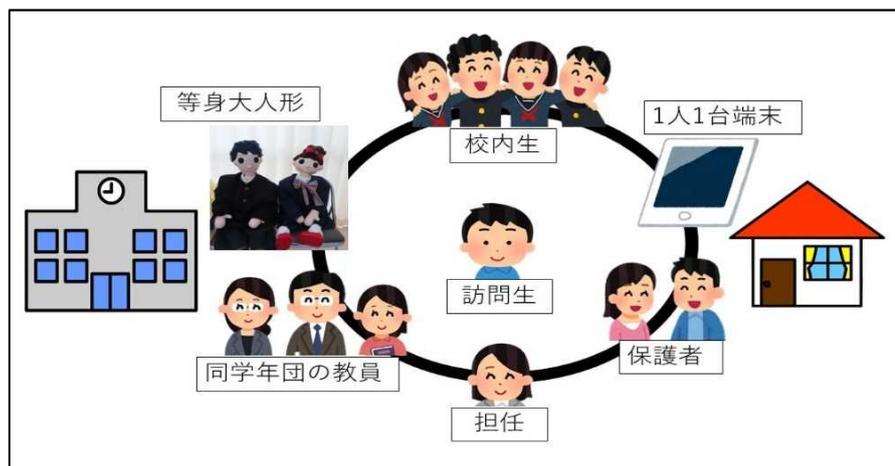
【リモート授業の様子とその成果】

また、保護者にとっても、このようリモート授業を受ける我が子の様子を見て「うちの子も一緒に授業できるんですね。」と、より学校への関心が高まる成果も

あった。

#### 4 普及させたい取組と期待される効果

以前は訪問生が年に数回、学校に来て校内生と交流するスクーリングという形をとっていた。本実践では、校内では訪問生を等身大人形で可視化するとともに、1人1台端末での交流を試みた。そうすることで生徒達はお互いに存在を意識しやすいものになったのではないか。それは、障害のある生徒の特性に合った分かりやすいツールであったからだと考える。1人1台端末を利用したビデオレターやリモート授業を定期的に行うことで、訪問生は日常では味わえない刺激を受け、新しい学習の形を経験できた。また、目の前にいない訪問生の存在を人形で代役にする取組によって、校内生は、近くにいない友達の存在を意識したり、誰かと一緒に学ぶ喜びを得たりすることができた。さらに、リモート授業は、管理職をはじめとする多くの教員が訪問生の授業に参加することができ、家庭に居ながら校内の授業に参加することができた。このように訪問生の周辺をつなぎ、環境を整えることは有効であった。それは、対象生徒を受け入れる側の体制が整い、そこが安心できる居場所であるということが重要であるのではないか。学校に登校できない友達や同じ学級の生徒に対してもこのような取組をすることで、家庭でも学校でも自分の居場所や相手の存在を意識することができた。そして、それぞれに与えられた役割を果たすことで、自己有用感や自己肯定感が高まる効果も期待できる。



【訪問生を受け入れるための体制イメージ図】

#### 5 課題及び今後の取組の方向

学校とは、できることを増やしていくだけの場所ではなく、同世代の子どもたちが「集団」として学ぶ場所である。物理的に離れて学習する訪問生と校内生が一つの「集団」として仲間意識をもち、互いの存在を感じ合いながら学校生活を送るために、訪問生の家に「学校」を届け、部屋を「教室」として、校内生と同じ時間を共有できる場面を作りたい。そのために、キーパーソンである訪問教育担当者として、今後も人形と1人1台端末というツールを活用していきたい。二つのツールのさらに有効的な活用方法を探りつつ、授業実践を繰り返していきながら、生徒たちがより意欲的に学校生活を送るようにしていきたい。また訪問生と校内生だけでなく、訪問生と訪問生、訪問生の家族同士、さらに学校の他の職員ともつながっていく機会を設定するなど、家庭と学校がより連携していく訪問教育をめざして、今後も努力していきたい。

<イラスト出典> かわいいフリー素材集いらすとや

(<https://www.irasutoya.com/p/terms.html>)